

課題1

氏名

昭和63年度国家試験問題

S63 (18) 斜視の検査

問題13 次の各場合について、大型弱視鏡により、右眼に金魚、左眼に金魚鉢を用いて検査したときに、実際空間、眼位、中心窩および視空間の関係が分かるように図示し、番号とともに簡潔に説明せよ。ただし、図に中心窩を(F)で明示のこと。

右眼での見え方、左眼での見え方、両眼での見え方

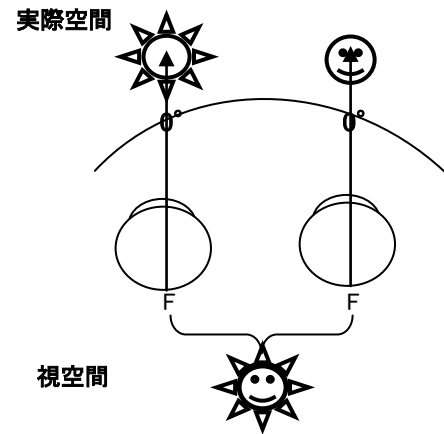
- 1. 正位で正常対応
- 2. 外斜視で正常対応
- 3. 内斜視で異常対応
- 4. 外斜視で対応欠如

課題1

解答

1. 両眼0° (付近)の位置で合致する

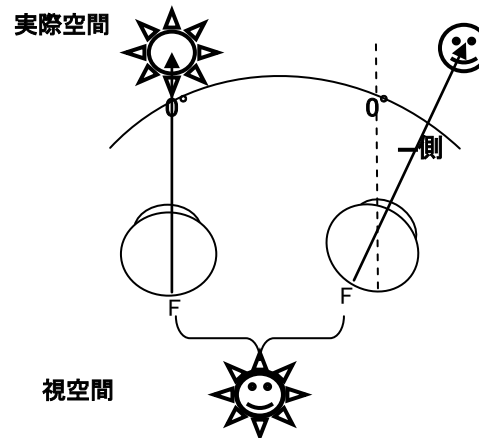
両眼の中心窩が対応点で他覚的斜視角=自覚的斜視角合致時、どちらの眼を消灯しても点灯眼は動かない



固視眼の消灯で斜視眼が不動かの確認!

2. 固視眼0°、斜視眼は一側で合致する。

両眼の中心窩が対応点で他覚的斜視角=自覚的斜視角合致時、固視眼の消灯で斜視眼は動かない



3. 調和性異常対応の場合

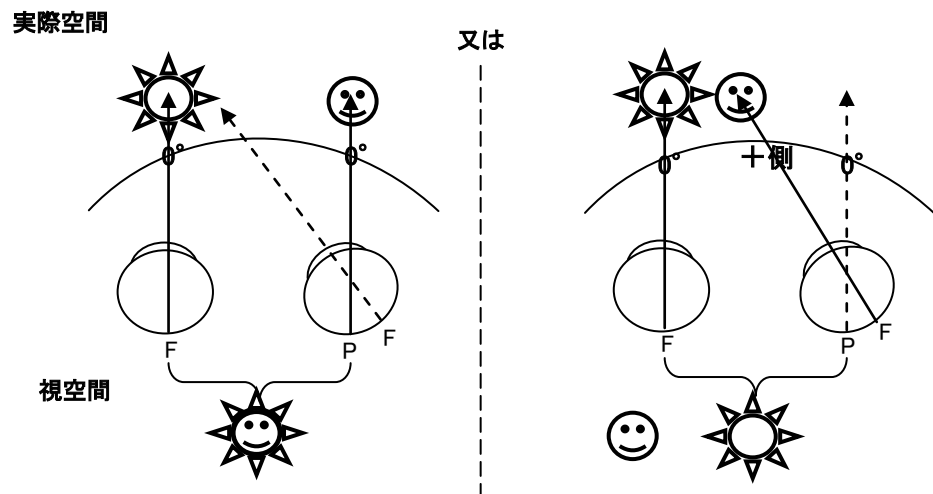
固視眼  $0^\circ$ 、斜視眼  $0^\circ$  (付近) の位置で合致する

固視眼の中心窩と斜視眼の道連れ領 P が対応しており他覚的斜視角  $\neq$  自覚的斜視角

異常角が他覚的斜視角と一致する

合致時、固視眼の消灯で斜視眼が中心固視であるならば外側に動く

斜視眼のアームを他覚的斜視角 (+側) に置くと他覚的斜視角の幅で交差性に離れる



不(非)調和性異常対応の場合

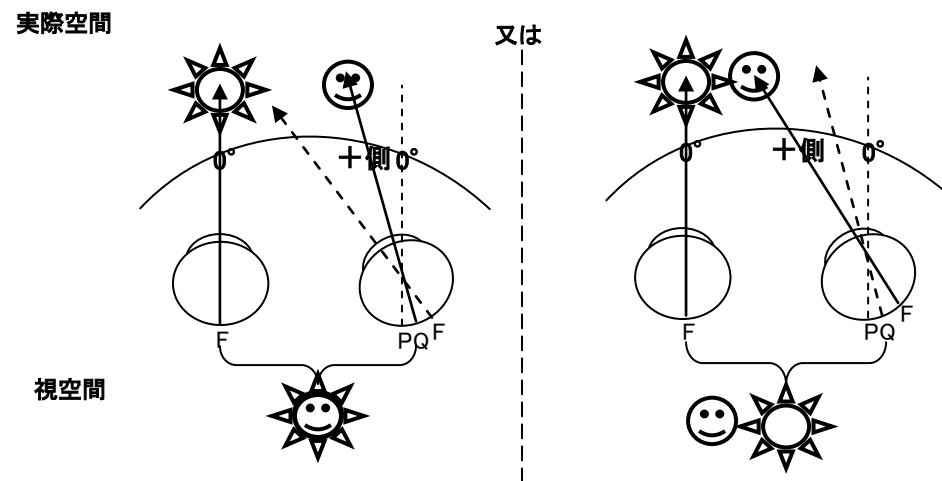
固視眼  $0^\circ$ 、一般的に斜視眼は  $0^\circ$  と他覚的斜視角の間で合致する。

固視眼の中心窩と斜視眼の Q が対応しており他覚的斜視角  $\neq$  自覚的斜視角

異常角が他覚的斜視角と一致しない

合致時、固視眼の消灯で斜視眼が中心固視であるならば動く

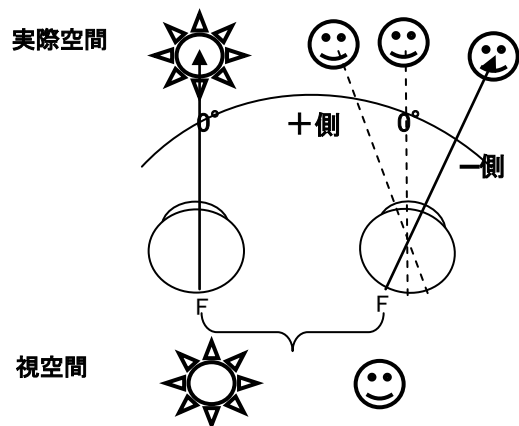
斜視眼のアームを他覚的斜視角 (+側) に置くと異常角の幅で一般的に交差性に離れる



4. どの方向へアームを動かしても合致せず、交差感もない。

2つの視標の方向や位置関係がわからない

自覚的斜視角が測定できない。



## 課題2

H1 (19) 斜視の検査

交代点減法にて

角膜反射は一致

問題20 20歳の男性。大型弱視鏡で他覚的斜視角は $-25^\circ$ で方向差はない。自覚的斜視角は $0^\circ$ で同時視がある。考えられる場合を2つあげ、その鑑別の要点を記せ。

## 課題2

## 解答

H1 (19) 斜視の検査

(交代点減法にて)

角膜反射は一致

問題20 20歳の男性。大型弱視鏡で他覚的斜視角は $-25^\circ$ で方向差はない。自覚的斜視角は $0^\circ$ で同時視がある。考えられる場合を2つあげ、その鑑別の要点を記せ。

簡単に書くなら

調和性異常対応外斜視と間歇性外斜視

《鑑別の要点》  
・眼位ずれが恒常性か間歇性か。  
・自覚的斜視角測定時に、固視眼を消すと斜視眼の整復運動(眼位ずれ)があれば調和性異常対応外斜視であり、なければ間歇性外斜視が考えられる。

もう少し踏み込んで書くなら

①調和性異常対応外斜視(中心固視) 採点として対応異常のみは△ 非調和性は×

SA測定時、眼位はXTだが、HARCなので $\rightarrow SA=0^\circ$

OA測定時、眼位はXTで、HARCだが中心固視なので交代点減すると $\rightarrow OA=-25^\circ$

②間歇性外斜視 {  
ア. 二重対応  
イ. 正常対応

どちらでも可であるし、間歇性外斜視のみでも可。

SA測定時、眼位は両眼開放しているのでXPとなり正常対応ならば $\rightarrow SA=0^\circ$

OA測定時、眼位は交代点減して融像除去しているのでXTとなり正常対応ならば $\rightarrow OA=-25^\circ$

二重対応ならば、対応欠如(こちらが多い)又は調和性異常対応となるが、交代点減であるので中心固視さえ可能であるならば対応に関係なく、 $\rightarrow OA=-25^\circ$

鑑別

眼位ずれが恒常性でSA測定時、固視眼の光を消すと斜視眼の整復運動があれば・・・①

眼位ずれが間歇性でSA測定時、固視眼の光を消すと斜視眼の整復運動がなければ・・・②

②の中で

外斜視になった時にSAの測定が不可能で交差感がなく重ならない場合は

・・・ア.の外斜視時に対応欠如となる場合

外斜視になった時にSAの測定が可能で $0^\circ$ 付近で重なり、固視眼を消すと斜視眼の整復運動(眼位ずれ)があれば・・・ア.の外斜視時に調和性異常対応となる場合

外斜視になった時にSAの測定が可能で、固視眼を消すと斜視眼の整復運動(眼位ずれ)がなければ

・・・イ.